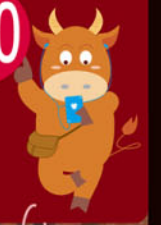


ふるさと  
の150  
誇り



博しレポート

板絵著色三十六歌仙図  
(江原浅間神社)

三輪の山いかにまちみむ年ふとも  
たつぬる人もあらしと思へは 伊勢

萬代の世の始とけふをいのりおきて  
いまゆくすゑは神そかそへむ 中納言朝忠



左ページ左上から小野小町、中納言兼輔、板上是則、源公忠、在原業平/不明、藤原興風、中納言家持、猿丸大夫  
/源順、源重之、藤原高光、藤原元真、清原元輔、紀貫之/権中納言敦忠、凡河内躬恒か、紀友則、素性法師/  
壬生忠岑、源信明、大中臣頼基、柿本人麻呂/右ページ左から中納言朝忠、伊勢



江原 浅間神社

甲西地区江原の浅間神社。かつては、市城南半から現在の富士川町を中心ひろがる大井郷の総鎮守として信仰を集めました。また、その本殿は桃山時代の作風を残す江戸時代前期の建築として市の指定文化財になっており、安置されるご神体は、富士山を表した最古級の像として、国の重要文化財に指定されています。この由緒ある神社に、江戸時代に奉納されたのが、今回紹介する板絵著色三十六歌仙図です。三十六歌仙とは平安時代の歌人、藤原公任によって選ばれた和歌の名人三十六人の総称です。正月におなじみの百人一首にも紹介されている在原業平や紀貫之、小野小町といった、みなさんも一度は耳にしたことがあるような人物も数多く含まれています。三十六歌仙をその代表歌とともに描き奉納する習慣は、鎌倉時代以降全国各地で見られるようになり、県内では笛吹市の美和神社(県指定)や山梨市の窪八幡神社(市指定)のものが知られていますが、市内では、ほかに例がありません。

浅間神社の歌仙図は板に描かれ、現在三十六枚中二十五枚がのこされています。それぞれの背面には、個別の番号とともに「寛永十七庚辰年十一月廿四日 願主 野呂瀬主税助 敬白」と記され、現在の鮎沢から十日市場あたりを拠点に武田家に仕え、武田家滅亡後は、最終的に尾張徳川家に仕えて名古屋に居を構えたという武士、野呂瀬主税助が、寛永十七年(一六四〇)に奉納したものであることがわかります。板絵の奉納は、人の心のあわれを深くとどめる和歌に神仏をなぐさめる意味が込められたとも、和歌の上達を願ったものともされますが、今から三八〇年前に奉納された板絵は、彼のふるさとの神社に寄せる思いを今に伝えるとともに、三十六歌仙の板絵を奉納するという当時の風習を知ることができるという意味でも貴重な文化財といえることができます。通常は、本殿の奥深く保管され、年月を経て絵の具の剥落など状態の良くないものもあるため、一般に公開されることはありませんが、新春にあたり雅な文化財として、今回画像を取り上げさせていただきました。文/写真文化財課

※ 先月号の本覧で背景の写真を明治23年(1948)としましたが、昭和23年(1948)の誤りでした。訂正してお詫びします。